

vivo

水戸芸術館音楽紙 [ヴィーヴォ]

11

NOVEMBER 2003

CONTENTS

| | |
|-----------------------|---|
| 水戸室内管弦楽団 | |
| 第55回&第56回定期演奏会 ...1~3 | |
| 最近の公演から | 4 |
| ネタマ&プチ情報 | 5 |
| インフォメーション | 6 |



写真上:水戸室内管弦楽団
写真下:左:トン・コープマン 右:ライナー・クスマウル

エネルギッシュなマエストロ トン・コープマン、MCOと共演。 11 / 8(土) 9(日)水戸室内管弦楽団第55回定期演奏会

笑いと言悦に満ちて

チェンバロ奏者、オルガン奏者、そして指揮者として活躍するオランダを代表するマエストロ、トン・コープマン(1995年に水戸芸術館で行ったオルガン・リサイタルをご記憶の方も多はずです)。その姿を見て、その演奏を聴いた方ならどなたでも、思わず微笑まざるにはられないことでしょう。昔のSF映画に出てくる謎の天才科学者のような風貌、そのくせ舞台に出てくるときはバスター・キートンのように慌ただしく動き、インタビューなどでは大きな目を人懐こく動かしながら忙ししゃべり続ける。常にエネルギーがありあまって一瞬の停滞も時間が惜しいといった様子です。これほどエネルギッシュな音楽家であるからこそ、バッハの全作品の大部分を録音しつつある(鍵盤奏者として、また指揮者として関われる作品はほぼすべて)という空恐ろしいような偉業に挑めるのでしょう。

そのエネルギーの出所はどこから来るのか。それが音楽への愛情にあることは疑いのないところです。古楽演奏の旗手であり、学識豊かなコープマンですが、バッハの音楽を演奏するときも、「その演奏が歴史的に正しいかどうか」よりも、「バッハの弟子のような気持ちで演奏し、それをバッハが喜んでくれればそれでいい」とする愛情あふれる謙虚な態度を崩しません。その演奏は、歴史的な考証を経たものでありつつ、自発性と即興性にあふれています。楽譜に書かれた音楽をいとおしみ、それを輝かせるのが嬉しくて仕方がない、というように。彼の鍵盤演奏は楽譜にない装飾をたっぷり

伴い、テンポ変動も頻繁なので、人によってはちょっとにぎやかすぎる、と感じられることでしょう。しかし、みんなが謹厳な演奏ばかりしていたら、クラシック音楽は堅苦しくなってしまう。コープマンの演奏からは、いつも笑いと言悦、そして愛情が、奔流のように放射されているのです。95年のオルガン・コンサートをお聴きになられた方なら、この言葉を信じていただけるはず。あの時のバッハ トッカータとフーガ 二短調 は、私たちを圧倒しつくし、飲み込み、未曾有の興奮へと誘い、荒れ狂う暴風のような名演でした。彼があのスティックで神秘的なグスタフ・レオンハルトの弟子というのは、ちょっと信じ難い気もしますが、偉大な師匠とまったく違う個性を確立するのも、優れた弟子の証なのでしょう。そして彼は指揮者として、手兵アムステルダム・バロック・オーケストラ(以下ABO)を長年率い膨大なコンサートと録音活動を行っています。ABOの覇気あふれる演奏からも、終始楽員を活気づけ、刺激し、自発性を引き出すコープマンの姿が見えてくるようです。カリスマ性や独裁者的にふるまうこととは無縁のこの音楽家は、きっと楽員たちと真の意味での「音楽仲間」の精神で結ばれているに違いありません。

マエストロ、2つの挑戦

そのコープマンが水戸室内管弦楽団(以下MCO)とはじめて共演するのがこの第55回定期演奏会ですが、ふたつの点で注目されます。ひとつは、ABOとの来日公演を常としてきたコープマン

が現代楽器のオーケストラと共演する、日本ではまれな機会であるということ。そもそもコープマンが現代楽器のオーケストラと共演する機会は決して多くなく、ディスクでは筆者の知る限り(ABOの前身であり、現代楽器を用いていたムジカ・アンティクワ・アムステルダムを除けば)オランダ放送室内管弦楽団(以下NRCO)とのシューベルト・アルバム(1994,96年録音。エラートWPCS-11110)しかありません。もうひとつは、「自分が基本とする音楽のレパートリーは18世紀まで」とするコープマンが例外的に振る19世紀の作曲家、シューベルトが今回の演奏会テーマとなっているということ。前述NRCOとのシューベルト録音は交響曲第5番と 未完成、そして 魔法の竖琴 序曲という内容でしたが、MCOとの共演では2曲の交響曲にレーガーが管弦楽編曲したシューベルト歌曲という珍しいレパートリーがカップリングされます。独唱はコープマンがよく起用しているクラウス・メルテンスです(以上の曲目についてはこの文章の後に続く、関根哲也執筆の演奏会曲目聴きどころコラムをご覧ください)。

NRCOとのシューベルトも躍動感あふれる演奏で楽しかったのですが、MCOとの初顔合わせは、どんなシューベルトをコンサートホールに響かせるのか。マエストロとMCOもまた、「音楽仲間」の精神で結ばれることを!

トン・コープマンのディスクを聴くなら...

*文中のシューベルト以外でおすすめをセレクトし



写真左から; CD

写真左から;
トン・コープマン
クラウス・メルテンス



ました。
 (指揮者として)モーツァルト:アイネ・クライネ・ナハトムジークほか(エラート WPCS11108)* ABO を指揮。飛び跳ねるバロックのモーツァルト。初期交響曲集(同11105、11106)、ハイドン:疾風怒濤期の交響曲集(同11111)もおすすめ。シューベルトおよびこの4枚は1枚1000円の超特価。
 (オルガン奏者として)ヘンデル:オルガン協奏曲集(エラート WPCS4771 ~ 2)* ABO と。ヘンデルをこの上なく幸福に聴かせる。
 (チェンバロ奏者として)C.P.E.バッハ:協奏曲と四重奏曲集(フィリップス UCCP-8011)* 初期の切れ味鋭い名盤。

なおコープマン本人にeメールインタビューを送っていますが、残念ながらこの vivo には返答が間に合いません。届き次第、芸術館 Web サイト等への掲載を考えておりますので、楽しみに!
 《矢澤》

聴きどころ満載のオール・シューベルト・プログラム
 その作品が響き始めると、スッと聴き手のかたわらに寄り添ってきて、微笑んでくれるようなシューベルト(1797 ~ 1828)はそんな作曲家といえるのではないのでしょうか。シューベルトが生まれた年にはすでにウィーンで活躍していたベートーヴェン(1770 ~ 1827)が、独立した音楽家として貴族と対等にわたりあい、「闘い」ながら作曲活動を行ったのに対し、シューベルトは富裕市民たちとの「友情」を糧に音楽を作ります。同時代のウィーンではと言っても、音楽家としてのあり方はまるで違っています。「ベートーヴェンの後で、何ができるだろう」と少年時代のシューベルトは友人シュパウンに語ったと伝えられますが、なにより友人との関係を大切にしたいシューベルトの人間的な優し

さ、温かさこそが、ベートーヴェンとは一味も二味も違う親近感を私たちに抱かせるのでしょうか。

2つの交響曲:第5番と 未完成
 ベートーヴェンとシューベルトが残した交響曲はどちらも9曲(シューベルトの場合、実際に演奏できない曲を外すと8曲)。しかし、その性格はかなり違うようです。

ベートーヴェンでは、ハイドンやモーツァルトを超えて新たな地平を見ようとする初期交響曲から、人類の理想を高らかに歌い上げる 第9 まで、個性的な1曲1曲が、作曲当時の彼の世界観や思想の表明でもありました。

一方、シューベルトの交響曲の多くは、作曲家が10代のうちに、アマチュア・オーケストラのために書かれました。交響曲の創作をもって己の存在を世に知らしめようとしたベートーヴェンとは異なり、シューベルトは大上段に構えることなく、あくまで等身大の世界の中で、あり余る天賦の才能を発揮しました。

交響曲 第5番 は、シューベルトが19歳のとき(1816年)の作品。ここに聴かれる軽やかなリズムと伸びやかな響きは、聴く者の心を浮き立たせ、充足させます。耳を傾けていると、シューベルトと親密な人たちだけが集うパーティに出席しているような気分にもなります。

1822年になると、ベートーヴェンの「重み」にもまったく引けをとらない交響曲が誕生します。未完成 です。魂を震撼させる低弦の嘆きから始まる劇的な第1楽章、彼岸の歌を奏でる夢幻的な第2楽章。ベートーヴェン的な意識とはまったく別の場所から生まれた、作曲家個人の夢を綴るような作品ですが、それだけにシューマンやマーラーなど後の時代の作曲家の交響曲を予告する、ロマン主義の深奥まで足を踏み入れた作品とも言えるでしょう。

ちなみに MCO は両曲とも指揮者なしで演奏したことがあります(第5番 = 第11 回定期、未完成 = 第36 回定期)。コープマンの指揮により、MCO の奏でるシューベルトはどんな表情を見せてくれるのでしょうか。

レーガー編曲による歌曲
 歌曲では、有名な のばら や ます など、シューベルトならではの優しい語り口を味わうことができます。しかし、歌詞の求める先鋭な音楽表現に、シューベルトは時折かられます。その代表的な歌曲が 魔王 です。語り手、父親、子供、魔王の4役を息もつかせぬ迫真さで音化した声楽パートはもちろん、高まる不安感・焦燥と馬の加速度的疾走を表現し切るピアノ伴奏の雄弁さは特筆すべきです。

全般にシューベルトのピアノ伴奏の書法があまりに見事であるために、それを管弦楽用に編曲して、原曲の世界をさらに多彩に描き出そうとする作曲家が、後世に続出します。ブラームス、ヴェーベルン、ブリテン…。今回演奏会で取り上げるのは、ドイツの作曲家マックス・レーガー(1873 ~ 1916)による編曲版です。バッハを敬愛し、絶対音楽を探索しつづけたレーガーの、虚飾のないアレンジが歌の背後から鈍い光を放っています。

演奏会では 魔王 のほか、音楽に寄す と3曲の 竖琴弾きの歌 が歌われます。庶民的な親しみやすさと芸術的先鋭性の間を自由に行き来したシューベルトの歌曲の魅力、レーガーのアレンジとともに存分に味わっていただけるプログラムです。

なお、メルテンスがアルバート指揮 NDR 放送管弦楽団の伴奏で歌った CD「Schubert arr. Reger/Orchestral Songs」(CPO 999 510-2)が出ていますので、興味をお持ちの方は CD ショップで探してみたいかがでしょうか。 《関根》

ゲスト・コンサートマスター&ソリストとしてクスマウルが再登場 11 / 22(土) 23(日)水戸室内管弦楽団第56回定期演奏会

伝統という壁を越えて

水戸室内管弦楽団(MCO)の演奏会として初めて、ゲスト奏者がコンサートマスターの席に座って行われたのが2001年11月の第47回定期演奏会でした。そのゲストというのは、クラウディオ・アッパードと楽員の熱心な勧誘に応じ1993年から98年までベルリン・フィルでコンサートマスタ

ーを務めてきたライナー・クスマウル。筆者は、この演奏会で受けた衝撃と感銘を今でも鮮明に覚えています。プログラムは、ベートーヴェンのピアノ、ヴァイオリン、チェロのための三重協奏曲とメンデルスゾーンの交響曲第3番“スコットランド”の2曲。ドイツ・オーストリアのオーケストラが、ベートーヴェンなど彼らの同郷の作品を演奏

するのを聴くときに感じる、あの独特の響や合理的精神とたおやかさが同居して音楽を構成していく感覚。まさに伝統が育んだその土地ならではの芳香とも呼べそうなもので、他国のオーケストラではなかなか表現できないのではないかと思います。が、目前のMCOの演奏に息づいていたものが、目の前のMCOの演奏に息づいていたのです。おそらくこうした事態は、クスマウ



写真左から；
ライナー・クスマウル
2001年MCO第47回定期演奏会より

ルが、コンサートマスターとして、弦パートの綿密な弓の使い方の指示やフレーズの作り方など、オーケストラの一員として、自身も音を出しながら、オーケストラ全体を引っ張っていったからこそ実現したのではないかと考えられます。もちろん、クスマウルの意図を見事に体現してみせた、MCOメンバーの確固たる技術と柔軟性がその前提としてあったからこそその結果なのです。

クスマウルとの新たな冒険

オール・モーツァルト・プログラム

第47回定期の感銘は、聴衆ばかりでなくMCOのメンバー達にとっても同じでした。(MCOのヴァイオリニスト渡辺貴和子さんのお話を後掲しています。)そして今回、ライナー・クスマウルを再びコンサートマスターとして迎えて演奏会が行われます。ちなみにMCOとクスマウルとの共演は今年で3回目。最初は1998年11月の第36回定期で、この時クスマウルはメンデルスゾーンの「ヴァイオリン、ピアノと弦楽合奏のための協奏曲」のソリストとして登場しています。

今回のMCOとの共演にクスマウルがどんなプログラムを用意するのか? ドイツ・オーストリアの系譜の音楽であろうことは予測できたのですが、蓋を開けてみて「おっ、すばらしい!」と思ったのは、きっと筆者だけではないはず!それは、オール・モーツァルト・プログラムというものでした。

過去、クスマウルが取り上げたどの曲よりも、モーツァルト作品はシンプルなテクスチャをもっていると言えるかもしれません。それだけに、ひとつのフレーズ、ひとつのハーモニー、ひいてはひとつの音さえも、おろそかにはできない音楽なのではないでしょうか。技術的なハードルを越えた一流の演奏家たちにとっては、複雑なテクスチャをもつ作品よりも、シンプルなモーツァルト作品の方が、音楽表現という本質においては難しいのではと思います。そうした意味でも、クスマウルは過去2回の共演を経て、今回は満を持してのモーツァルト・プログラムとなるのです。

ちなみに、過去のMCOとの共演でクスマウルは、ベートーヴェンやメンデルスゾーンという19世紀の作品を取り上げてきていますが、彼が18世紀以前の音楽にも造詣が深いことは、ベルリン・フィルハーモニー・パロク・ゾリステンの芸術監督を務めているということからもお分かりいただけるでしょう。

また、モーツァルト作品といえば、作品そのものの価値からも、室内管弦楽団という編成規模の点

からも、MCOにとってはレパートリーの核のひとつとなっている重要な作品群です。過去の演奏曲を作曲者別に数え上げてもモーツァルト作品は、他を大きく引き離しての第1位。これまでに、指揮者なしの演奏会はもとより、小澤征爾(90年第1回、91年第7回、94年第17回、97年第29回、99年第37回、02年第50回、03年第53回)、若杉弘(90年第3回)、シモン・ゴールドベルク(93年第13回)、ルドルフ・バルシャイ(94年第20回、97年第32回)、アンドラーシュ・シフ(99年第39回)、トレヴァー・ピノック(99年第40回、01年第48回)、広上淳一(00年第42回)の指揮で演奏を重ねています。そのモーツァルト作品で、クスマウルとMCOは、再び感動をもたらしてくれるのか? ほんとうに心から期待しています。

光に包まれた華麗な音楽

演奏曲は、歌劇「フィガロの結婚」序曲、ヴァイオリン協奏曲 第3番、セレナード第7番「ハフナー」というようにモーツァルトの管弦楽曲の多彩なジャンルの作品が集められました。これらのラインナップを見て思うのは、モーツァルトの管弦楽作品の中でも、光に溢れた天上からもたらされたような、明るく華やかな作品が集められているということです。無論それらは、単なる娯楽音楽などではなく、この天才作曲家は、それらの作品の中に、真理の探究の道程ともいえるような深遠な世界をもしのばせているのです。

フィガロの結婚 は、モーツァルトのオペラ作品として最も親しまれている作品のひとつ。その序曲は18世紀のオペラ・ブッフア(喜劇的オペラ)の陽気な雰囲気にも満たされた、心が浮き立つような音楽です。

ヴァイオリン協奏曲 第3番 は、この作品の完成と同じ年(1775年)に書かれた続く2曲とともに、不朽の金字塔をうちたてている作品です。独奏パートとオーケストラの対話的な性格、管楽器の重用などモーツァルト独自のスタイルが結実している一方で、フランス・ヴァイオリン音楽からの影響を研究者たちは指摘しており、美しい音色で奏される優美な旋律が印象的な作品です。今回の演奏会では、クスマウルが独奏パートを受け持ちます。

セレナード第7番「ハフナー」は、モーツァルトの作曲したセレナードの中で、楽器編成においても演奏時間においても最も大きな規模をもつ、若き日のモーツァルトの傑作です。「ハフナー」というのは、モーツァルト一家と親交のあったザルト

ブルクの大富豪の名前です。この作品はハフナー一家の当主の姉マリー・エリーザベトの婚礼の前夜祭に奏されるために書かれた華やかな音楽です。8つの楽章から構成されていますが、そのうち第2楽章から第4楽章までは独奏ヴァイオリンが登場します。演奏会では、クスマウルがコンサートマスターとしてオーケストラをまとめながら、同時にこの独奏パートも務めます。

室内楽を演奏するようにオーケストラの音を出したい。そうした理想を掲げ指揮者を置かずに行うMCOの演奏会。ライナー・クスマウルをゲスト・コンサートマスター&ソリストに迎え、かけがえのないモーツァルト作品というレパートリーを携えて、MCOはその理想に向かって、また一歩進み出るので。

《中村》

クスマウル氏との再びの共演にあたって

渡辺貴和子

ライナー・クスマウル氏との初めての出会いは、5年前にメンデルスゾーンの「ヴァイオリン、ピアノと弦楽合奏のための協奏曲」のソリストとして水戸室内管弦楽団と共演した時でした。大柄な体格のヴァイオリニストが何とかかわいらしく、優しく、また時には力強く演奏され、私達を温かく楽しい気分に分けて下さった事をよく憶えています。

次の機会は2年前、ゲスト・コンサートマスターとしてメンデルスゾーンの「シンフォニー スコットランド」をリードされた時でした。光栄にも私はクスマウル氏の隣の席で弾く事ができ、学ぶ事ばかりでした。ベルリン・フィルのコンサートマスターを務めた方だけに、このシンフォニーはもう何度も演奏されたのでしょうか。曲のスタイルや構成をはっきりとつかんだ上に、細かいフレーズやニュアンスを浮き立たせ、管楽器と弦楽器のバランスを整えながらコンサートマスターの席からリードされ、素晴らしい演奏ができた喜びは忘れられません。

見栄、はったりやマンネリの演奏で聴衆を沸かせる演奏家が目につく今日のごろ、クスマウル氏は純粹に音楽を心と体で感じ、ごく自然に演奏しながら私達を導く腕を持つ、稀な存在だと思い、心から尊敬できる音楽家の1人です。

11月には水戸でクスマウル氏とまた一緒に練習し演奏ができる、その貴重な日々を心待ちにしています。

最近の公演から
SEPTEMBER



1



2



3



4



5



6



7



8

高山三智子 ピアノ・リサイタル

(9月5日)

演奏会で個々の作品の解釈や演奏にとどまらず、作曲家や演奏家の生き様とでも呼べそうな奥底のメッセージがキャッチできたように感じられる時、心が震える。この日の演奏会は、そうした感動を聴衆にもたらしていたのではないだろうか。音楽に身を捧げるかのように演奏活動を行い続けてきた高山さんだけに、予定していた4月の公演が急病で断念せざるを得なかったことは、ほんとうに断腸の思いであったことだろう。そして、この日の演奏会にかける想いはいっそう切実で熱いものであったに違いない。彼女の情熱が、ピアノの名曲群によりいっそうの輝きを与え、羽ばたかせた。アンコールは「チャイコフスキイ：四季 より“松雪草”」、「ショパン：ノクターン 作品9の2、幻想即興曲 作品66」《中村》

アンケートから “生きていてよかった”と思わせて頂けた演奏会でした。(水戸市:T.O.さん)

繊細なテクニックと重厚な迫力に圧倒されっ放しでした。どことなくロシアの香りもする大和なでしこのかれんなアピールに心打たれました。(水戸市:A.E.さん) CDやテレビの演奏などとは全くちがう。その音色は、深みとともに透き通っていて力強く、この世のすべてをのみこむような演奏でした。(H.N.さん) 聴きたいと思う曲をすてきにきかせていただき、うれしい、たのしい夜でした!!(水戸市の方)

茨城の名手・名歌手たち 第14回

(9月13日)

今年で第14回を迎えた「茨城の名手・名歌手たち」。「管楽器・打楽器・声楽(以上ソロ)、器楽アンサンブル(2~5人まで)」を対象に5月11日に行われたオーディションの合格者10名と1組がステージに登場しました。司会を務める予定だった畑中良輔氏が精密検査のため出演できなくなり、急遽オーディション審査委員の三善清達氏(東京音楽大学名誉教授)に代わっていただきました。出演者の中にも体調が思わしくない方が何人か出てしまいましたが、皆さんステージ上では今持てる力を存分に発揮していたようです。これからの方たちばかりなので、これを糧に更なる研鑽を積んでいただきたいと思えます。近い将来、プロムナードコンサート「ヴァリエーションズ」などで、またお目にかかれるかも知れません。読者の皆様も、彼らのこれからの活躍を暖かく見守ってください。《関根》

アンケートから 若いということは、何と素晴ら

しいことでしょうか。未来があるからですね。皆々、秋のはじめの宵に輝いていました。フレッシュで、とてもいいコンサートでした。(那珂郡:Y.N.さん) オーディションから聞かせていただいていたので、興味を持っていました。皆様、のびのびと演奏をされていたと思います。(水戸市:S.K.さん) オーディションを受けての人だけあって、レベルが高く、楽しめました。(那珂郡:K.F.さん) 管楽器と声楽のプログラムで、楽しみに来ました。管楽器の演奏のテクニクと、歌の表現力・素晴らしい声に感動しました。芸術館のホールの響きが、また心地よく、内容の濃い、聴いていて楽しい演奏会でした。(水戸市:U.O.さん)

早島万紀子 オルガン・リサイタル

(9月29日)

早島万紀子さんはこの日のために幾度となく芸術館を訪れ、音色作りとリハーサルを行なった。最終的には作られた音色(ストップ)の組み合わせは、フランス・オルガン音楽ということもあり、130を超えるものとなった。プログラムは、冒頭のグリニを除けば近・現代のフランス・オルガン音楽が成立順に並べられた。とりわけ印象的であったのが、エチオピア教会での典礼を題材とした現代作曲家フローレンツの「ロード」。極限ともいえるオルガンの音色のパレットを必要とし、彼女が用意した130を超える音色の組み合わせの大半は、実はこの作品のためのものであった。しかも、この作品ではアシスタントまでもが演奏に加わるよう作曲家が指定しているほど複雑なテクスチャをもっており、今回はこの演奏のために、岡本桃子さんと伊藤純子さんの2人のオルガニストがアシスタントを務めた。早島さんの演奏は、ときに軽やかに、ときにドラマティックに展開され、エントランスホールは透明な輝きのオルガンの音色で満たされた。アンコールは「アラン：晩課のための後奏曲」。《中村》

アンケートから 当初難解な音楽を想像していたが、すんなりと耳に入った。音楽は先入観なしに無心で聴くべきものと実感する。フランス・オルガン音楽の流れを俯瞰することができ、充実した内容でした。(水戸市:T.M.さん) 今夜はいままで知らなかったオルガンの音色やハーモニーに、発見の連続だった。(水戸市:S.E.さん) 非常に霊性の高い、精神の高さを感じ、何か天上界のストーリーを聴きながら見ている感じでした。3000円は安い!!すごい価値がありました。(水戸市:R.I.さん)

* nettama= ネットワークする猫。タマ。芸術館のコンサートをサカナにいろんなどころへnettamaします。



「未完成交響樂」

未完成。なんて心をときめかせる言葉なんだろう。作者の死、あるいは收拾がつかないほど膨らみすぎたアイデアゆえの放棄等、なんらかの事情で完成に至らなかった作品のトルソ。未完の部分に創り手はいったいどんなヴィジョンを思い描いていたのか。「その先」は受け手の想像力に任されているだけに、未完成の作品には完成された偉大な作品とは違う不思議な吸引力がある。ダ・ヴィンチ『東方の三賢王の礼拝』、マン『詐欺師フェリクス・クルルの告白』、手塚治虫『ネオ・ファウスト』等々。クラシック音楽におけるその代名詞は、文句なしにMCO第55回演奏会でも演奏されるシューベルトのその名も「未完成」交響曲だろう(もちろん、シューベルトが「未完成」と命名したわけではないのはご存知の通りだが)。完成した最初の2楽章だけで不朽の価値を持つこの交響曲、あとの2楽章が未完成に終わった理由は永遠の謎。最初のふたつの楽章で十分な美しさを持つと作曲者が判断したとか、大規模なふたつの楽章を受け止める後続楽章を思いつかなかったとか、諸説紛々。「わが恋の終わりと共にこの交響曲も終わらぬ」というのはさすがに伝説のようだが。

しかし、あのふたつの楽章の先を聴いてみたいという人々の執念が「未完成」を「完成」させるといって「壮挙」を成し遂げた。英国のブライアン・ニューボールドという音楽学者による「復元版」だ。ニューボールドはシューベルトが書きかけて放棄した第3楽章の資料(主部のピアノ・スコアとトリオ部の旋律線、および2ページ分のオーケストラ・スコア)をもとに第3楽章を完成させた。第4楽章は「ロザムンデ」の口短調の間奏曲を流用している。マリナー指揮アカデミー・オヴ・セント・マーティン・イン・ザ・フィールズの演奏によるCDで聴いてみよう(フィリップス 412 591-2 輸入盤6枚組、シューベルト交響曲全集)。復元された第3楽章は「グレート」の第3楽章にちょっと似ているかな。短調と長調が交錯する主題もシューベルト的だが、少し旋律の魅力には欠けるかなあ。一方「ロザムンデ」の間奏曲はそもそも「未完成」の終楽章として構想されたという説があるから「復元版」でそのまま用いられている意図はわかるけれど、前半ふたつの楽章の重みを受け止めるにはやや軽量級な気もする。そんなわけで僕には、同じセットに収録されたシューベルトの「その他未完成交響曲」の復元版の方がおもしろい。全部で6曲もある未完成作品のうち、第6番以降(1818年以降)に書かれた5曲がこのセットにすべてニ

ューボールドの復元版で収録されている(80年代に出たこのセット、現在は入手困難な様子だが資料的価値は非常に高くぜひ復刻してほしいものだ)。第6番以降のある時期から、シューベルトにとって交響曲を書くことがとても困難な仕事になってしまったことがよくわかる。断片的に残された1818年のD.615(Dはドイツ語番号)と20年頃のD.708はどちらも宝のような旋律が詰まっているけど、それを発展させるところで筆が止まることしばしば。1821年のD.729は全曲のスケッチは完成しているので昔からワインガルトナーによるオーケストレーション版なども存在し、「第7番」という番号を割り当てられていた。最近の新ドイツ語作品目録では「第7番」の表示を削除されてしまったので、これまで「第8番」だったいわゆる「未完成」交響曲と「第9番」だった「グレート」の番号が一番ずつくり上がることになった。MCOのちらしなどで「未完成」が「第7(8)番」という表記になっているのはこの事情を反映している。しかし、この曲はなかなかいい。第6番の軽やかさを残しつつ「グレート」を予兆させる地滑りのようなクレッシェンドが頻発し、スケールが大きい。40分にも及ぶ大曲なのである。終楽章にはちょっとびっくりするような新鮮な和声も出てくる。シューベルトがちゃんと完成していたら、「未完成」「グレート」と併せてブルックナーの7,8,9番みたいに「後期三大交響曲」と呼ばれていたかも。

このセットにはさらに1828年、つまりシューベルトが死の年に手がけた最後の交響曲と推測されるD.936aの第3楽章までの復元版も収録されている(第4楽章のスケッチも少し残っているそうだがここでは復元されていない)。グレート以降の交響曲はどんな壮大な世界になるのだろうと期待がつのるがまるで初期交響曲のようなさりげない出だしに意表をつかれる。第1楽章展開部の終わり近く、まるでブルックナーの交響曲みたいな金管のコラールが出現して驚くがこれがシューベルトの指定なのかニューボールドのアレンジなのか、気になるなあ。第2楽章は遠く時代を隔てたマーラーの緩徐楽

章を思わせる部分もあるし、スケルツォは保続低音の上に乗った農民舞曲だが、けっこう複雑な構成(ロンド風)かつ対位的で、それまでのシューベルトのスケルツォとは明らかに違う。全体に未整理な状態であることは否めないけれど、死に阻まれることなくシューベルトが推敲し完成していたら「グレート」以降の新しい地平を拓く交響曲になっていたかもしれない。

ニューボールドの復元作業にはきっと賛否両論あるだろうし、シューベルトがこれらを完成したら当然ニューボールドの「完成版」とは違うものになっていただろうけれど、こうやって断章を聴ける形にし、シューベルトの創作における苦闘の軌跡を明らかにしてくれただけでも、感謝しなくては(もちろん演奏したマリナーと仲間たち、およびレコード会社にも)。後期シューベルトの交響曲については他にも紛失したと言われる1825年の「グムデン」ガスタイン交響曲の謎(最近では「グレート」の同一説で落ち着いているようだ)とか、1823年のピアノ4手による「グラン・デュオ」D.812は交響曲のつもりだった説とか、いろいろなミステリーがある。おそらくはそうとうの苦吟の中、少なくとも「未完成」と「グレート」という途方もない傑作ふたつを僕たちに残してくれたシューベルトにも、あらためて感謝しよう。

さて僕はなにを隠そう「未完成」作品にこよなく心ひかれる者で、この項でもシューベルトにからめて他の作曲家の「未完成」交響曲をいろいろ紹介しようと思っていたのだが、シューベルトだけで字数が尽きてしまった。ベートーヴェンやマーラーの10番とかシベリウスの8番とかブルックナーの9番(断章を収録したアーノンクルのすごいCDが出た)とかいろいろネタはあるのだが、今日はここまでこの文章も「未完成」続編をやれ、というお声があれば喜んで。



マリナーのCDジャケット:「The 10 Symphonies」となっているところにご注目。



MCOヴァイオリンスト・久保陽子の初のソロCD「レジエンド〜久保陽子ヴァイオリン名曲集 第1集」(Regulus KBYK-1001)が「久保陽子レーベル」という新レーベルの第1弾として10

月23日にリリースされました。録音場所は、水戸芸術館コンサートホールATM。クライスラーの「ブニャーニ」の様式による前奏曲とアレグロをはじめ、ヴィエニャフスキ、チャイコフスキ、サン・サーンス、J.S.バッハなど、タイトルが示す通り広く親しまれているヴァイオリンの名曲が集められています。館内ショップ・コントロールポアンでも扱っています。サイン入りCDが手に入るかも!?

information

チケットに関するお問い合わせ

...水戸芸術館チケット予約センター / 029-231-8000
 営業時間 / 9:30 ~ 18:00 (月曜休館)

公演内容や企画に関するお問い合わせ

...水戸芸術館音楽部門 / 029-227-8118

【ATM便り】毎月1回茨城新聞に不定期登場。

NHK-FM 水戸【FM水戸アップデート】火曜日 18:15頃 ~ 15分ほど (不定期登場) 水戸周辺 83.2MHz、日立周辺 84.2MHz。

チケット・インフォメーション 11月2日(日)発売分 ●●●●●●●●

ニュー・イヤー・コンサート 2004
 1/5 (月) 18:00開演 料金(全席指定): A席 ¥4,000 B席 ¥3,000
 兼氏規雄 クラリネット・リサイタル
 1/17 (土) 18:30開演 料金(全席自由): ¥3,000

ニュー・イヤー・コンサート 2004には、10月30日(木)より友の会の先行電話予約があります。

これからの演奏会・残席情報 ●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●

○...残席あり(20席以上) ...残席わずか(20席未満) ×...残席なし 中央...中央ブロック 左右・裏...左右ブロックおよびステージ裏 補助...補助席

水戸室内管弦楽団第55回定期演奏会

11/8(土) ...中央×、左右・裏
 11/9(日) ...中央×、左右・裏

水戸室内管弦楽団第56回定期演奏会

11/22(土) ...中央×、左右・裏
 11/23(日) ...中央×、左右・裏

ミト・デラルコ 第6回演奏会

12/13(土) ...中央、左右・裏

クリスマス・プレゼント・コンサート 2003

12/23(火・祝) ...中央×、左右・裏

畑中良輔の 日本のうた セミナー 第3期

1/18(日) ...自由席

10/13(月)現在の状況です。

公演当日に残券がある場合、開演1時間前より水戸芸術館チケットカウンターでお得な学生券を発売いたします。ご購入の際には学生証(記名章)をお持ちください。公開セミナーなど、学生券のない公演もございますので、予めお問い合わせ下さい。

固定席が売り切れ次第、補助席を販売いたします。

水戸芸術館の主な11月のスケジュール

コンサートホールATM

水戸二中創立55周年記念清流祭合唱コンクール
 11/1(土)13:00開演 入場無料
 水戸室内管弦楽団第55回定期演奏会
 11/8(土)18:30開演、11/9(日)14:00開演
 料金(全席指定):S席 ¥8,000 A席 ¥6,000 B席 ¥4,500
 五軒小学校創立130周年記念コンサート
 11/15(土)13:00開演 入場無料
 新荘地区音楽の祭典オータムコンサート
 11/16(日)13:00開演 入場無料
 水戸室内管弦楽団第56回定期演奏会
 11/22(土)18:30開演、11/23(日)14:00開演
 料金(全席指定):S席 ¥7,000 A席 ¥5,500 B席 ¥4,000

エントランスホール

パイプオルガン プロムナード・コンサート
 11/29(土)13:30 / 15:00 11/30(日)12:00 / 13:00
 入場無料 演奏は各回20分程度です。

ACM劇場

シリーズ・日本の劇作家たち 1 岸田國士
 『命を弄ぶ男ふたり』『紙風船』
 11/7(金)19:00開演、11/8(土)19:00開演、11/9(日)14:00開演
 料金(全席自由):一般 ¥2,000 学生 ¥1,500

『歳月』

11/21(金)19:00開演、11/22(土)19:00開演、11/23(日)14:00開演、
 11/28(金)19:00開演、11/29(土)19:00開演、11/30(日)14:00開演
 料金(全席自由):一般 ¥3,000 学生 ¥2,500

現代美術センター

「YES オノ・ヨーコ」展
 10/25(土)~11/12(月・祝)9:30~18:00(入場は17:30まで)
 休館日:月曜日 ただし、11/3(月)、11/24(月)は休館。翌11/4(火)、
 11/25(火)は開館。
 入場料:一般 ¥800 前売・団体(20名以上) ¥600 中学生以下、65歳以上、
 各種障害者手帳をお持ちの方は無料

茨城の主な11月の演奏会

常陽藝文センター TEL / 029(231)6611

市毛恵子 ピアノチャリティコンサート
 11/16(日)14:30開演 (問)市毛 TEL / 029(254)2467
 茨城県民によるハーモニカチャリティコンサート2003
 11/22(土)14:00開演
 (問)茨城県ハーモニカ協議会事務局 渡辺 TEL / 029(273)7428
 茨城県芸術祭 長唄演奏会
 11/23(日)11:00開演 (問)杵屋 TEL / 029(231)2802

茨城県民文化センター TEL / 029(241)1166

シンシナティ交響楽団&諏訪内晶子 11/7(金)18:30開演
 茨城交響楽団 第87回定期演奏会
 11/23(日)14:00開演 (問)茨城交響楽団事務局 TEL / 029(233)1448

水戸市民会館 TEL / 029(224)7521

シャントゥール・ド・ミト テノールの響宴
 11/29(土)18:30開演 (問)シャントゥール・ド・ミト TEL / 029(240)3300

ひたちなか市文化会館 TEL / 029(275)1122

《クラシック音楽活性化事業》 浜まゆみ マリンバコンサート
 11/13(木)18:30開演
 勝田混声合唱団創立20周年記念 第13回演奏会 “秋に歌う”
 11/16(日)14:00開演 (問)勝田混声合唱団 TEL / 029(272)0065
 ネクサス・プラスバンド the 9th コンサート
 11/23(日)14:00開演 (問)ネクサス・プラスバンド TEL / 090-1735-7946

日立シビックセンター TEL / 0294(24)7711

日立シビックセンター音楽シリーズ2003 VIVA!! ピアノデュオ・コンサート
 11/23(日)15:00開演

常陸太田市民交流センター・パルティホール TEL / 0294(73)1234

ハラダ タカシ オンド・マルトノの世界 11/29(土)18:30開演

大宮町文化センター・ロゼホール TEL / 0295(53)7200

カトリーン・ショルツ(ヴァイオリン)&ベルリン室内管弦楽団 コンサート
 11/28(金)18:30開演

東海文化センター TEL / 029(282)8511

ケヴィン・ケナー ピアノリサイタル 11/15(土)18:30開演

ギター文化館 TEL / 0299(46)2457

井上 學・富山幸男 ギターデュオコンサート 11/2(日)15:00開演
 ウルフイン・リースケ コンサート 11/22(土)15:00開演

パバホール TEL / 029(852)5881

スクロヴァチェフスキ指揮 ザールブリュッケン放送交響楽団演奏会
 11/1(土)15:00開演
 筑波大学吹奏楽団第50回記念定期演奏会 11/3(月)16:00開演
 2003茨城県芸術祭県民コンサート() 11/8(土)13:00開演
 つくば古典音楽合唱団創立15周年記念 第17回定期演奏会
 11/22(土)17:00開演



「カリナオペラ」表の音、in茨城 11/29(土)14:00開演
 上遠野音楽事務所 TEL / 03(3568)1650

鹿嶋勤労文化会館 TEL / 0299(83)5911

竹内英仁 ピアノリサイタル 11/14(金)18:30開演

水戸芸術館音楽紙「ヴィーヴォ」 2003年11月発行 第94号
 編集・発行/水戸芸術館音楽部門 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8
 TEL:029-227-8118 FAX:029-227-8130

e-mail [ankmr@arttowermito.or.jp] URL [http://www.arttowermito.or.jp/]
 編集 / 水戸芸術館音楽部門 (五十音順): 関根哲也 中崎美智代 中村 晃 馬場千恵
 矢澤孝樹(編集長)
 DTP / office west

印刷所 / 株式会社あけぼの印刷社

次号は...MDA再生! 第9号復活!
 そしてクリスマスに和の香りが...